



たくや & みほ

蔦と深流、二重に結ばれた縁

BORN DECODED

YOUR BIRTH WAS CODED. WE DECODE IT.

相性鑑定

たくや & みほ

四柱推命（しちゅうすいめい）は、二人の生まれ持つエネルギーがどう響き合うかを映し出します——どこで調和し、どこで緊張が生まれ、なぜ惹かれ合わずにいけないのか。

二人のスコアは【89】——『自然な調和』の関係です。天干では丁壬合（ひのとみずのえごう）と乙庚合（きのとかのえごう）という二重の干合（かんごう）が命式を横断し、「初めて会った気がしない」と感じさせる深層の縁が刻まれています。さらに五行の流れでは、みほの壬水（水陽）がたくやの乙木（木陰）を育てる水生木（すいせいもく）の相生（そうせい）があり、二人は自然と補い合う方向へ引き寄せられます。一方、日支の巳戌怨嗔（みいぬえんじん）が関係の底に「言葉にしにくい、じわりとした温度差」をもたらしており、これがスコアをわずかに引き下げつつも、二人の関係に独特の深みと緊張感を与えています。

二人の相性

89

自然な調和



たくや

みほ



二人のケミストリー

- ・木と水の五行の流れ
- ・二人の命式に4つの調和点
- ・天干の合が2組

深い川が蔦の根を濡らす—— なぜ二人は離れられないのか

たくやは乙木（きのと）——岩の隙間からでも伸び続ける、しなやかな蔦です。折れない、曲がる、でも根は深い。みほは壬水（みずのえ）——地形を選ばず流れ続ける、大きな川の本流です。止まらない、澄んでいる、でも深部は誰も知らない。蔦は川の水を吸い上げながら高くへ伸び、川は蔦の根に守られながら岸を保つ。二人の関係は、そういう「互いがいないと成り立たない」構造を、出会った日から静かに始めていました。

命式の天干を並べると、みほの丁火（ひのと）とたくやの壬水（みずのえ）が丁壬合（ひのとみずのえごう）を結び、たくやの乙木（きのと）とみほの庚金（かのえ）が乙庚合（きのとかのえごう）を結びます。一つの命式の中で二重の干合が成立するのは、命理の世界でも「縁が二重に結ばれている」と読む、珍しい配置です。加えて、みほの壬水・癸水（みずのえ・みずのと）という豊かな水の気が、たくやの乙木を根から潤す水生木（すいせいもく）の流れを作り、たくやは「この人といると自分が伸びる」という感覚を本能的に受け取ります。

ただし、二人の日支——たくやの巳（み）とみほの戌（いぬ）——は怨嗔（えんじん）の関係にあります。怨嗔とは、沖（ちゅう）のように激しくぶつかるわけではなく、「なんとなく合わない気がする」「言い方じゃなくて、存在の温度が微妙にずれている」という、静かな摩擦です。惹かれ合う力と、じわりとしたずれ——この二つが同居しているのが、二人の関係の本質的な手触りです。

なぜそばにいたくなるのか—— 引力の根っこ

たくやの命式は火・土・水がそれぞれ25%ずつ均等に分布し、乙木の身強（みきょう）として安定した軸を持っています。一方みほは水が38%を占め、木も25%と豊か。この配置は、みほがたくやの乙木に水と養分を送り続ける「育てる側」の役割を自然に担いやすいことを示しています。たくやは意識しないうちに「みほといると考えが整理される」「アイデアが湧いてくる」と感じ、みほは「たくやを応援すると自分も満たされる」という充実感を覚えやすいでしょう。

二重の干合が示すのは、表面の相性だけではありません。丁壬合は「火と水が溶け合う」——情熱と深さが一つになる縁。乙庚合は「木と金が互いを整える」——みほの鋭さがたくやの柔軟さを形にし、たくやの伸びやかさがみほの固さをほぐす縁です。「なぜこの人と一緒にいるのか」と言葉で説明できない夜があるとしたら、それはこの命式レベルの縁が、理屈より先に働いているからかもしれません。

全体の構成 — 全12章・約17ページ

- 1 二人の相性 ★このサンプルに収録
- 2 深い川が鳶の根を濡らす——なぜ二人は離れられないのか★このサンプルに収録
- 3 なぜそばにいたくなるのか——引力の根っこ ★このサンプルに収録
- 4 巳戌怨嗔——言葉にならない、あの温度差の正体
- 5 鳶が川に根を下ろした日——恋愛期から夫婦へ
- 6 川沿いに根を張る——夫婦という共同作業の実際
- 7 家族という土台——それぞれの親の顔
- 8 互いの目に映る、もう一人の自分
- 9 二人の一年——季節ごとの気配
- 10 二人の質問
- 11 二人へのガイド
- 12 二人の五行から生まれる、小さな儀式

※ページ数は命式によって前後します

この先は、二人の生年月日から始まります。